

西方見聞録 しゃんはい 上海の旅

～喧噪と静謐、そして混沌～

2002年(平成14年)2月18日

澤井篤司



海峯賓館 (Hotel Sofitel Hyland Shanghai) 部屋より撮影

中国西南航空旅客機の窓から眼下を見下ろすと、そこには広大な平野が広がる。巨大な白い柱の様なモノが地平線の果てまで無数に横たわっている。高度が下がるつれ、それがビニールハウス群であったことがわかる。肥沃な田園が地平線まで広がるこの地域は中国南東地区「上海」。

上海の緯度はほぼ鹿児島に近いが、大陸風の影響であろうか、現在気温は東京並み（5～15℃）。雪は今年まだ一度も降っていないらしい（数年前には市内に積もったとのこと）。

上海はおろか中国に降り立つのも初めてである私は、見聞きした情報との体感誤差を感じる事がせいっぱいであり、現象の意味することを理解することだけに多くの時間を費やしてしまった。この報告書のなかには帰国後、確かめる意味で書物を読み改めて知った事柄・事実もある。同じ東洋の国ではあるが、それほど日本における日常とはかけ離れていることを示すものでもある。

ここに3日間、急ぎ足で回った上海見聞記を、空きスペースを観光写真で埋めながら5つのテーマごとに表現してみる。

中国の基礎データ

国名 中華人民共和国（首都 北京）
総面積 959万7000k㎡（世界3位）
日本との時差 ▲1時間
人口 約13億人（126,583万人）
（男65,355万人、女61,228万人）
人口増加率 0.877%
人口密度 131人/k㎡
通貨 人民元（RMBとも書く）
14年2月時点 1元≒16円



宿泊：海崙賓館
Hotel Sofitel Hyland Shanghai

序節 「中国と上海」

知ってのとおり中国の人口は約1.3億人。この巨大市場を持つ国は爆発的な経済成長を果たしつつあり、「世界の工場」・「世紀の工場」と言われ確実に世界経済に織り込まれつつある。2001年11月、申請から16年もの準備期間を経て、WTO（世界貿易機関）に加盟し、いよいよ国際経済に参入した。

世界最大の潜在マーケット（自転車4000万台、オートバイ1100万台、テレビ4000万台、携帯電話1億2000万台、いずれも世界一）と、現地生産に必要な労働力・原材料がかなりの品質でしかも安価に手に入る巨大国。中国政府は国を挙げて技術の高度化に取り組む。「安かろう悪かろう」と揶揄されてきた中国製品は、日本製品を模倣するなかで技術を学び、本家の技術者を唸らせるまでに品質を向上させている。中国が生産において世界シェア1位を占める商品は「粗鋼」、「エアコン」、「モーターバイク」、「テレビ」、「時計」、「冷蔵庫」と多岐に渡る。「カメラ」と「電話機」に至っては世界シェアの58%を占めている。

※ 「世界の工場」中国は、家電製品やパソコン、衣料品といった多くの最終製品の分野で圧倒的な優位を保っているが、今やセメント、ポリエステルなど、川上のあらゆる素材も中国国内で製造され、国内外の需要に応えられるようになりつつある。

「巨大市場」と「生産基地」という両面から、日本企業は中国の存在を避けて通れない段階に来ている。安価な労働力と高い技術を求め、日本企業は中国に生産拠点をシフトしている。日本にとって国内生産の空洞化が大きな問題を孕んでいることは日夜の報道の通りである。

さてここで見誤ってはいけないことがある。巨大なマーケットであることを、例えば携帯電話1億2000万台普及という事実から読みとることができるが、現段階でそれなりに購買力がある経済人口は国内において約2億人とみられ、それが2015年には5億人に達すると予想されている。それに中国は人口爆発を抑制するために少子化政策を進めているが、2030－2050年には1.5－1.6億人のピークを迎えると試算されている。つまり中国マーケットはこれから本格的なマーケット成長を迎えるということである。

もうひとつに中国国内の地域間格差がある。たとえば中国人1人あたりのGDP（国内総生産）は全土平均では800ドルだが、今回我々が行った上海地区では4500ドルに達している。上海のなかでも浦東新区だけでみれば2万ドル近い。要は「1.3億人のマーケットを1つに考えると判断を間違う」ということである。

今回商人塾の研修地を選んだのは、上記で示した中国最大の商業都市「上海市」。上海市の総面積は6185 km²というから、東京都の約3倍にあたる。人口約1,600万人。東京都より460万人も多い。世界一の高さを誇るインテリジェントビルの建設計画が進み、世界発の実用リアモーターカーの建設も始まった。日米欧の巨大資本がすさまじい勢いで流れ込んでいる大都市上海。2008年のオリンピックを控え、日々進化している中国最

大の商業都市、この街の活力とダイナミズムを体感することが今回の研修のテーマである。

千歳空港から直行で約3時間。上海虹橋国際空港（1992年完成）に降り立ったのは16時過ぎ、これから3泊4日の上海旅行が始まる。

※ 4日目は午前8時の千歳行きに乗るので、実質2日半というところか。

行程は 2月3日（日） 16:00 上海虹橋国際空港 着。租界時代に建てられた欧米建築物で有名な外灘から海底トンネルを通り、船上レストランへ。ホテルまでは上海一の繁華街、「南京東路」を徒歩で探索。

2月4日（月） 7:00 上海市内観光（オプションツアー）。外灘、豫園（1559年造営、2万㎡の敷地を有する中国式庭園）、上海老街（民芸品、日用品、骨董品に溢れる。東京浅草にも似た商店街）、上海博物館（地上4階建、収蔵品12万点、20万冊もの蔵書を誇る中国古代芸術の殿堂）、その後自由。

2月5日（火） 7:00 水の都蘇州へ（オプションツアー、上海から約1時間半）。虎丘（秦の始皇帝が掘り返したといわれる春秋時代の呉王の墓陵）、拙政園（明代に造営された蘇州四大名園）、絹（シルク）博物館、刺繍博物館。世界遺産寒山寺、その後自由。

2月6日（水） 8:30 上海虹橋国際空港より千歳へ。



← 「上海 市街中心部（一部）
第二次大戦前は欧米諸国の租界地が築かれたことから”東洋の魔都”と呼ばれたこともある。今はいたるところに高層ビルが立ち並び、近代都市と呼ぶに相応しい様相を見せている。

「上海」総面積 6185k ㎡
人口約 1600 万人
地下鉄 2 線、バス多数

一節 「人」

空港で我々を迎えたのは現地添乗員の黄^{コウ}さん（上海、20代女性）、生粋の上海人とのことだ。ホテルまでの車中、淀みのない流暢な日本語で現地を説明する。意図的に多少難解な日本語での質問を彼女にしてみたのだが、全く平然と答える。日本語力はほぼ完璧であった。

※ 今回のツアーでは3日間で3人の現地添乗員が我々を案内したが、3人とも同様に語学（日本語）は堪能であった。2人目（20代女性）は説明の間、歩きながら今の日本の気候、芸能のこと、手に持つデジタルカメラの値段などを好奇心旺盛に聞く。

3人目の筆さん（蘇州、40代男性）は要所要所に冗句を入れる程の余裕で（蘇州^{そしゅう}の国定公園でひと休みしたときに飲んだお茶があまり美味しくなかったとの話題のなかで、「粗^そ（蘇）茶ですから」と笑いで答え）、小林一茶、芭蕉の句と重ね合わせながら名跡寺院のなかにある漢詩の意味を説いていく。

「何年、日本にいたのですか？」

私は同様の質問を3人にした。彼女たちがあまりにネイティブな日本語を話しているのが当然数年の日本留学経験があると思ったからである。しかし驚いたことに3人とも留学はおろか日本の地に降り立ったこともないという。日本と中国の貨幣価値の格差が彼女たちが日本の地を容易に踏めない理由であることは想像に難くない。

共通していたことは3人とも大学の外国語専攻で「日本語」を選択していたこと、ただそれだけであった。机上での勉強だけでこれだけの流暢な語力を習得したのである。

高い能力を身に付ければ思い通りに出世し、高収入を得られる能力主義社会が中国経済の活力の源になっている。

筆氏は言う。「今、中国では子供の教育に真剣です。」

一人っ子政策（1979年）のため親の関心は子供の教育に注がれる。極端なまでの能力主義社会での勝者には、それ相当の見返りが社会に用意されている。改革開放政策の波に乗って1000億円以上の資産を持つ富豪も続々と誕生した。

その裏返しで、能力がないと見なされた社員や生産調整で余った労働者を簡単に解雇する傾向も強い。3か月ごとに社員の成績がランク付けされ、3ランク下がった社員は即座に解雇。年間で5～10%の社員が淘汰され入れ替わっている企業も珍しくないとのことだ。

現地を観光するなかで、特に郊外の観光地では日本人観光客と見るや、民芸品など手に抱え、叫びながらモノを売ろうとする人達に囲まれる。なかには露骨に「100円！」と言って手を出し腕を掴^{つか}んで離さない人達もいる。

彼女達添乗員にとっては業務上、道中見慣れた光景であるはずである。困惑する我々に彼女達添乗員が同胞の人達をどうさばくかに私は注目していた。しかし彼女達はそういった同国の人に一瞥もしない。むしろそういった光景を見ない様、見えない位置に立って我々を待っている。こうすることで同胞に対する礼節と自尊を守っている様に感じた。

こういった光景を目にし、そして会話の節々から、彼女たちは単に日本に憧れを持って、あるいは日本人が好きで日本語を猛烈に勉強した訳ではないのではないか、そう感じた。彼女たちが目指しているものはもっと崇高な高いところにある。戦後荒廃の日本に於いても進駐軍に群がった同様の光景があったはずだ。その様な光景を目のあたりにして奮起した日本人も多かったに相違ない。

「無視して下さい」

筆さんは冷酷なほど無感情に言う。

飽くなき上昇志向が覆う中国。すさまじいまでの「超」能力主義とエネルギーを、唯一今回接した3人の中国人添乗員のなかに垣間見ることができた。

写真—「南京東路」→

外灘から西に5キロにわたって延びる南京路は上海一の大繁華街。歩行者天国もある通り沿いに大型デパートや各種専門店が軒を連ね、深夜まで大勢の人で賑わっている。



二節 「街」

上海に降り立ち車中から見えるのは高層ビル群である。いたるところで開発行為がなされ、解体される旧住宅、一方その横では建設中の高層ビル。東洋のニューヨークに比喻される上海であるが、正にその通り、摩天楼の様相を醸し出している。

我々が泊まったホテルは上海一の繁華街「南京東路」に面した地上30階建てのシティホテルである。部屋からは見飽きない街の光景が眼下に広がる。

この光景には我々の常識が通用しないものがある。

おもちゃのブロックを圧縮して並べた様な、極端なほど密接した低層住宅地。

そのすぐ隣では24時間建設中の超高層ビル。日本では常識となっている用途地域の概念、日照権などもろもろの人的権利、そもそもこの大都市の都市計画はどうなっているのか。

1600万人が暮らす特別行政地区（政府直轄区）上海市。中国政府が威信をかけて開発するこの街の目指すものなど一旅行者に想像できるはずもない。

上海は今、空前の住宅ブームにわいている。主流は分譲マンションや連棟式住宅である。そもそも中国では、住宅は国有企業などから支給されるものだった。ところが、市場経済化の進展で国有企業改革が始まると、政府は国民に持ち家取得を促すようになったとのことだ。利子税導入により、貯蓄志向が強かった中国人から貯金を吐き出させ、一方で住宅減税を導入し、住宅購入者には所得税の全額還付、外国人にも自由に住宅取得ができるような環境を整えた。

3か月ほど離れると、もう別の街になっているといわれる「上海」。政府の内需拡大策によるものが、今自分が眼下に見る光景なのである。



東京の一等地の億ションに相当するものが、上海市内では約1500万円。

日中の物価差によるものだが、かつての日本の不動産バブルにも似た建設ラッシュが続き、マンション価格は前年比2%ほどの値上がりをしているようだ。



「上海の不動産価格は、今後大幅に上昇するのではないか」との見方もあるが、「バブルではなく、実需。中国では住宅に土地代が含まれないので、投機対象にはならない」との指摘もある。

しかしここ数十年で人口が2、3億人増えるという中国である（中国国内に日本が2つ3つできるに相当する）。大都市における開発と需要は止まらなると素人目にも映る。地元不動産会社が企画する中所得者を対象とした「郊外の分譲マンション見学ツアー」は盛況なようで、毎週バスが連なるとのことだ。

200万円（3000万円）を越える高級住宅に外資系企業の社員ら高所得層が飛びつく。

そのビル群の下には老築化した平屋住居が群がっている。7%以上の年成長率を続けている中国。著しい成長の波に乗った文明と、それに乗り遅れていく文明。急激な市場経済化が進む中で混沌とした同居化の現象がホテルの窓からはっきりと見てとれる（表紙写真）。

三節 「権利と責任」

上海市内をハイヤーで走ってみる。市内のさほど遠くないところなら20元もあれば十分である。整備された道路網、連立するビル群、活況な商業エリア。車中から走馬燈の様
に変わる光景は刺激的でもある。上海は日本と違い右側通行、左ハンドルである。運転席
は暴漢による攻撃を避けるためであろうプラスチックの板で完全にガードされている。
日本の都市の様に一角ごとに信号機はなく、無信号の交差点が非常に多い。

車は一気にスピードを上げる。前に自転車に乗った人が走っている。運転手は全くその
ことに感心がないが如くスピードを緩めず接近する。

「危ない！」

この上海の旅のなかで、私はこの悲鳴にも似た言葉を何度心のなかで叫んだだろう。
運転者は容赦なくクラクションを鳴らす。それは自転車が避けるまで執拗に続けられる。
交差点で四方から車が接近する。早く頭を突っこんだ方が勝ちなのか、4車ともスピード
を緩める気配がない。どの車も相手に道を譲る気配がない。右から急に自転車に乗った少
年が飛び出してくる。自転車はすんでのところ急ブレーキをかけ衝突を免れる。歩行者
も同様、ひっきりなしに道路を横断する。中央線を平然と歩いている勇者もいる。車は歩
行者が見えないかの様に前後からスピードを緩めることなく往来している。止むことのな
いクラクションが街の至るところで鳴り続けている。



←写真一 外灘^{わいたん}

かつて”東洋の魔都”と呼ばれた上海。往時の壮麗な建造物が残る黄浦江沿いの外灘界限は、今も上海を代表する観光スポット。異国情緒漂う街並みに夜のネオンが灯ると幻想的雰囲気。同行した添乗員は「香港は百万ドルの夜景」と言われるが、上海外灘は百一
万ドルの夜景だと言ったことが、やけに耳に残る・・・。

どういふルールがあるのか。今回の小旅行では答えは出なかったが、^{おぼろげ}臆気ながら2つのルールがあると感じた。ひとつは「暗黙の優先」である。個人の権利と言った方が良いかもしれないが、この主張が強く通るのである。自分が先に交差点に入ったことが主張権利を取得できるのであり、それを認めた他車はブレーキをかける。強引とも見える追い越し、割り込みも、そこに空間があるから割り込んだ訳で、割り込まれた方も決して怒らない。派手にクラクションを鳴らして威嚇している様にしか見えない^{いか}厳つい運転手も怒る様相を見せない。しかし暗黙の了解事項が崩されたとき派手に怒る。窓を開け怒鳴る。

もうひとつは「自己責任の究極たるもの」なのか。
自分の周りには冒されない権利空間が存在するのである。その権利は誰にも譲らないし、
また、人から与えられたものでもない。自分が主張し、守るものであって、そこに他力依
存はない。歩行者も自己責任で歩いているのであって、その判断が間違っていて車にはね
られたのであるなら、責任は車側にあるのではなく、歩行者にあるのである。
「そういった権利意識と責任意識がはっきりとあるのではないか」
こう確信したのは添乗員の次の一言であった。

「私はこれまでに事故を見たことは子供のときに1回、それ以降はありません」

無秩序、無法ともいえるこの交通規制、このなかにあって事故がない……。
日本では至るところに信号機があり、事故が起きない様に数多くのルールが存在する。知
っての通り日本での死亡原因では「交通事故死」は「がん死」に継いで2位である。
上海にも交通ルール（速度規制などないが如し）は最小限あると思うが、日本に比べては
圧倒的に少なく、我々にとっては危険極まりない規制にも関わらず事故がないというこ
を説明するのに他の説明があるのであろうか。
規制（他によって与えられる身の安全）と安心からくる油断（横から飛び出す訳がない）
に浸っているうちに、人間の最も鋭敏な部分である「感覚」を我々日本人は忘れてしまっ
ているのかもしれない。



←写真－「^{よえん}豫園」

明代の中国式庭園。数々の池や楼閣に緑が配され、
庭園全体が迷路のような複雑な構造になっている。
観光客で賑わう豫園周辺は、土産物店や飲食店が密集す
る古くからの繁華街（上海老街）。

写真－「中国茶・試飲」→

中国と言えば、やはりお茶。^{てつかんのん}鉄観音や^{ろんじんちや}龍井茶・・・等々。
至るところで売っている。試飲したときはたいへん美味しい
のだが、買ってきたものを家で飲むとたいへん^{にが}苦い。
そう言えば茶の種類によって茶器はもちろん、入れ方、飲み方
も違っていたはずだ。しまった！！説明をしっかりと聞いておく
べきだった。



四節 「経済」

上海の街を見渡ただけで急速な経済発展は見てとれる。煌びやかなネオン、不夜城とも言える上海中心街、進むモータリゼーションとともに道路開発が止むことなく進む。

※ 自動車業界には1人あたりのGDPが3500ドルを越えるとモータリゼーションが加速するとの世界的な”法則”がある。上海の人口は約1600万人。1人あたりのGDPは昨年、4500ドルを突破。

香港・ニューヨークを彷彿とさせる高層ビル。外灘地区を見渡すとキャノン、富士フィルム、東芝など錚々たる日本企業の看板が目につき少しほっとする。

日本企業の中国に対する姿勢も様変わりしている。日本国内の生産拠点を大陸に移し、「低コスト・高品質」を武器に中国本土や日本、アジア、世界に売り込みをかける。そんな事業戦略は今や産業界の常識となっている。コスト高の日本にとって中国は正に利に適った生産拠点地であり、商業においては日本の問屋制度を覆す直接商品仕入地とも言える。

日本離れを加速させる日本企業。しかし今や人件費の安さだけで中国の製造業の現状を語るのは時代錯誤にすぎる。

最近の新聞、経済誌から引用しよう。

「日本人は、自分たちは世界に比べ二倍の努力をしていると考えている。だが中国は三倍の努力をしている」

「中国の生産技術は、すでに日本と同等かそれ以上になっている」

「中国企業の品質は急速に向上している。もちろん、価格競争力もある。これまで中国進出の最大のリスクは司法リスクとパートナーズリスクといわれていたが、今後は中国国内企業との競争リスクを背負うことになる」

日本国内の製造メーカー、商社の代表者が口々に中国の脅威を語る。

中国の携帯電話利用者は1億4500万人で、既に米国を抜いて世界一。数を制すれば、商品やサービスの「標準」を一手に牛耳ることができる。第三世代携帯電話で「世界標準」となる道程が見えてきている。虎視眈々と中国発の世界標準を狙う中国。中国では一昨年から米マイクロソフト社に対抗すべく、政府の肝いりで中国産のパソコン基本ソフト(OS)開発も始まった。進む研究開発、勤勉な学生。中国は知的所有権までターゲットにしつつある。

一方、日本では「ゆとり教育」なるものを今年からいよいよ実施する。学習量を3割程

カットし、落ちこぼれなく全員が理解できる教育システムを目指すという。中国では先に述べた様に極端なるエリート主義、全員が厳しい生存競争に晒され、優れた人間を排出していく。背後には膨大な資源（天然ガス、鉱物）が眠っている。

日本がバブル経済を謳歌していた1980年代後半、中国は発展の遅れた経済小国だった。それがいま、世界貿易機関（WTO）に加盟して自由主義経済の表舞台に飛び出し、世界屈指の経済大国に変わろうとしている。一足飛びに世界を目指す中国企業。勤勉さを失いつつある日本。果たして日本経済に勝機はあるのか。

日本政府が中国に対し、毎年2000億円もの開発援助をしている事実がふと頭を過ぎり、日本の行く末（方向性）に一抹の不安と憤りを覚えた。

上海で至るところで行われている土木工事・建設工事・そして土地開発。走りにくい迷路の様な道路を高速でタクシーが走る。そう、上海のインフラ事業はまだ始まったばかりなのである。

（巻末の経済データ参照）

写真－「蘇州」→

上海から西へ車で1時間半、街中に運河や水路が網の目のように張り巡らされ、古くから江南の交通の要所として栄えてきた蘇州は、「東洋のベニス」ともいわれる美しい水の都。蘇州夜曲でも知られる、いにしへの面影を



残した街の情景を見ていると、ここが本当の中国なんだと妙に安心した気持ちになった・

。。。。
のもつかの間、実のところ蘇州は人口約700万人（北海道の全人口より多いではないか）を数え、江蘇省一の経済都市であった。松下電工、富士通、住友金属、住友銀行、キャノン、錚々たる日本企業の工場が立ち並ぶ。

上海に比べ、土地代は4分の1、人件費も3分の2から2分の1、住宅も3分の1程度の費用で取得できるらしい。進出外資企業には所得税が2年間免除、3年目から8年目までの6年間は半額という「二免六半減」を実施している。蘇州新区は今や日系企業だけでなく、欧米企業にも人気が高い開発区になった。

五節 「ルール」

幾度も書いたことだが、上海は日々刻々と変わっている。我々が見たものは高層ビルに代表される東洋屈指の文明、そしてその陰にひっそりと潜む未開地そして貧困生活者。この街に感じることは貧富の差だけではなかった。文明と文化（規則も含む）のインバランスが強く印象に残った。

地下鉄に乗るため最新式の自動改札機を通る。こぎれいなホームに電車が滑り込んでくる。ドアが開くと、降りる人を待たずに群衆が乗り込む。

そして前述した交通ルール。自己主張の強さ。

極度に早い文明進化の後にルールが遅れて着いてきている感じである。

日本式ルールに慣れてしまっているせいなのか、特異な感が残る。

加熱する中国投資ブームの裏には「訴訟リスク」という落とし穴があるとのことである。過去、多くの日本企業が、中国の法律、社会常識を知らないがために合弁企業との摩擦など多くの懸念が付きまとい、そして予想外の損失を被ってきた。

在中国日本商工会議所会頭（三井物産常務）大島氏が語る。

「中国ビジネスには相当むずかしい点がある。一つは知的財産権の問題。つまり”ニセモノ”の多さだ。二つめは密輸の多さ。三つめの問題は代金回収。与信問題は中国ビジネスのキーポイントだ」

上海老街を歩くと、数え切れないほどの商店、露天商が連なっている。値段は1元から1000元まで多くの民芸品、骨董品、山水画などがところ狭しと並んでいる。ある骨董品屋が連なるところを通ったとき、同行した添乗員がそっと耳打ちする。

「ここで売られているものは全てニセモノです」

本物は顔見知りの常連客にしか出さないらしい。なるほど一見の客にはニセモノとわからない様に、あえて値を高く設定し、掘り出し物であることを演出してある。脇で売り子が日本人らしき女性観光客に大声で「ロレックス、千円、千円！」と連呼している。

上海老街は地元の人が日用品・食品を買うところでもあり、本物の方が当然多くあるには違いないが、ニセモノ・コピー商品が大手を振って売られている様は日本では見られない光景である。

WTO 加盟、APEC 開催、オリンピック開催という世界にかかわる大きなイベントが今後続くことから国際ルールが徐々に浸透するようにはなるであろう。

それにしても広大な国土と13億の人民。別国を思わせる地域間格差、中国特有の戸籍制度そして档案。経済舞台に国際デビューを果たした中国にはこれからの国際ルールの浸透、貿易障壁の撤廃、地域間レベルの平準化等々相当の困難がつきまとうと思うが果たしてどうであろう。

終節 「あとかき」

今回の小旅行で中国を、あるいは上海を語ることは不可能に近い。足早に上海市内を回ったが、これとて市内全域の0.1%にも満たないだろう。

今回参加したのは土田悦也氏、真田哲雄氏、関口秀二氏、鉢呂良一氏、そして私の5名。ツアー内容は飛行機とホテルだけがついている、^{いわゆる}所謂フリーツアー。土田氏にとっては上海は二度目とあって我々とは行動を共にせず、自らの好奇心で目当ての名所旧跡等を廻られた様子。真田氏も北京に一度渡航経験がある。私をはじめ、上海が初めての方は、まずはお決まりの上海市内オプションツアーを申し込み、上海の定番をひと通り観光。翌日蘇州へ。食事は様々な処でとったが、何処として同じ味がない。2、3回食べて、これが上海の（中国の）味だと思ったら大間違い。

皆さんと驚きと感想を言い合いながらの4日間、濃縮されたたいへん貴重な^{とき}刻でした。

^{あきんどじゆく}商人塾レポートということで「経済」に厚く書こうとは思ったが、早、紙面オーバー。単表ごとの説明は割愛しますが、「中国経済」に関する直近データを抜粋し、次ページに「中国経済データ集」として別添致しました。

平成14年2月18日

澤井篤司



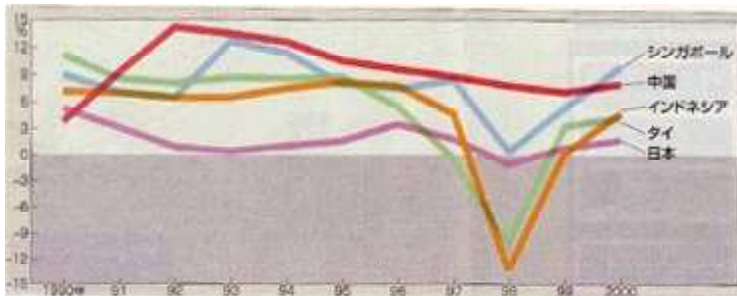
↑落款購入



豫園内庭園

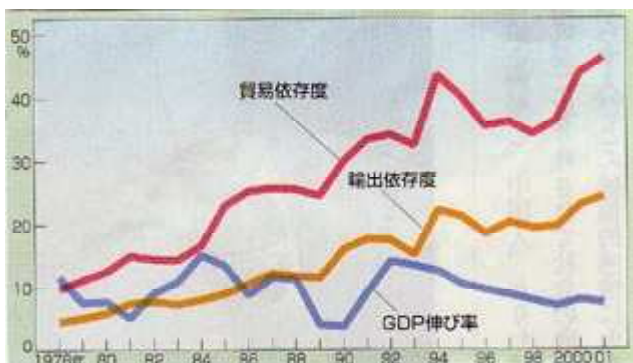
中国经济データ集

GDP 実質成長率の推移 「アジアで唯一高成長率を維持」



出所：IMF International Financial Statistics

対外依存度 「高まる中国经济の対外依存度」

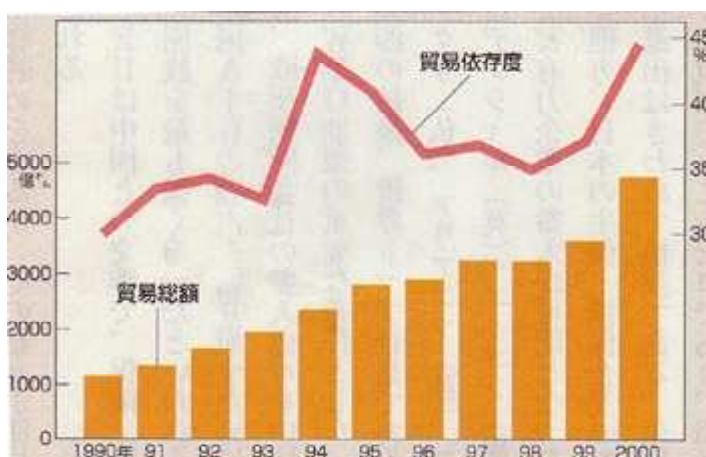


注1：貿易依存度 = (輸出 + 輸入) / GDP × 100

輸出依存度 = 輸出 / GDP × 100

出所：中国統計年鑑に基づく試算

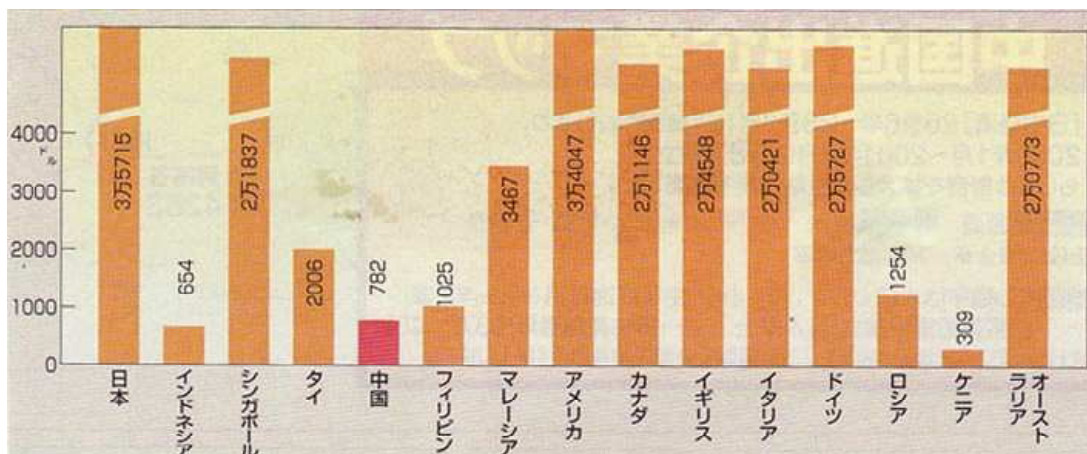
中国の対外貿易



注：貿易依存度 = 貿易総額 / GDP

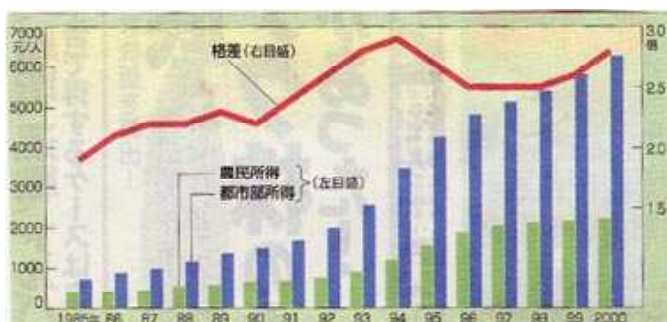
出所：中国統計摘要 (2001年版)

1人あたり GDP 国際比較 「経済水準はまだ低い」



出所：IMF International Financial Statistics (1999年)

所得格差 「拡大する都市・農村部の所得格差」



広がる東西格差「GDP 比較」

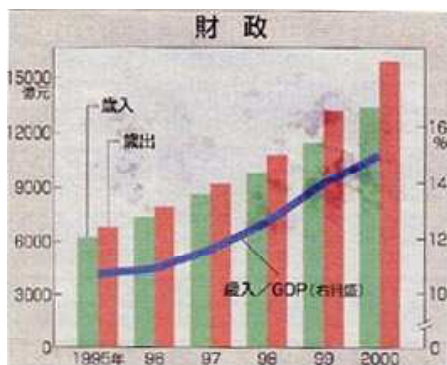
省(市)別GDP比較		単位：億元
東部地区	北京市	2460.5
	上海市	4551.2
	江蘇省	8584.7
	広東省	9506.0
西部地区	重慶(市)	1589.6
	貴州省	993.3
	雲南省	1955.3
	青海省	263.1

出所：中国統計年鑑 2000年版

注1：都市所得は1人あたり可処分所得、農村部所得は1人あたり純生活費収入

注2：格差は農村部所得を1とした場合の都市部所得

財政 「巨大化する国家財政」



出所：中国統計年鑑 (2000年版)

貿易収支 「世界の工場から貿易大国へ」



出所：海関統計

中国の主要輸出入電子製品 (1998年)

輸出製品		輸入製品	
金額	金額	金額	金額
自動データ処理機関連	5,160	集積回路関連	4,790
ラジオ、テープレコーダー	2,000	半導体関連	1,790
固定電話機	1,300	自動データ処理機関連	1,680
集積回路関連	1,140	プリント基板	860
半導体関連	770	スイッチ関連	470
カラーテレビ	490	携帯電話	410
ビデオレコーダー	420	コンデンサー	380

単位：百万円

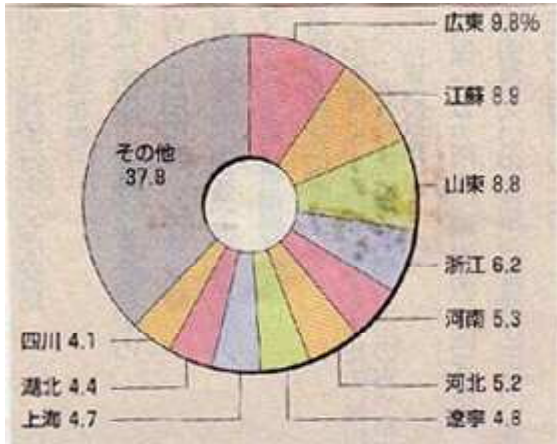
出所："Challenges and Opportunities for Hong Kong's Electronics Industry"
Hong Kong Trade Development Council、October 2000 より抜粋

人民元の対日本円レート 「人民元の切下げはあるのか」



出所：IMF International Financial Statistics

省別 GDP (2000 年) 「沿海部は急成長」



以 上